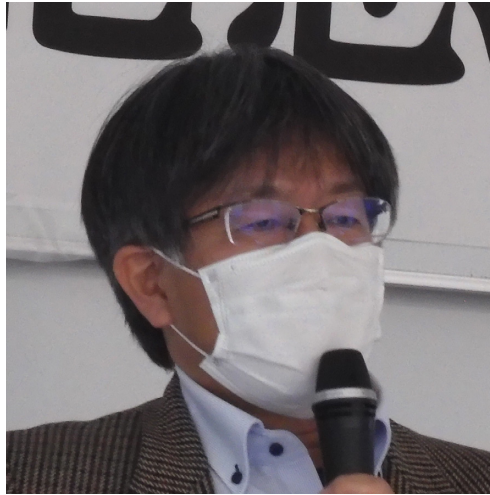


講演 3

物質文化研究の立場から

---



角南聡一郎  
(神奈川大学・准教授)

私に与られたテーマは「物質文化研究の立場から」ですが、本日の後藤先生のご発表の中で使われていた写真にも、私が若い頃に後藤先生にフィールドワークに連れていただいていた時に撮影されたものもありましたので、そういった思い出話が多くなることはご了承ください。私は物質文化研究の立場から、大林太良と遠藤庄治にフォーカスしてお話いたします。

#### ■大林太良を知ったきっかけ

そもそも大林太良という人は神話研究者であると私は学生の頃ずっと思っていましたし、2003年に環太平洋神話研究会が立ち上がるときに、私は台湾の原住民研究に興味があつて勉強していたものですから、そこで仲良くなった神話学者・宗教民族学者の山田仁史さんといろいろな話をしていました。そのときに、「後藤先生が今度京都の同志社女子大にいらして、環太平洋神話研究会を立ち上げようと思うから角南さんも来ないか」と誘ってくださったわけです。その理由として、後藤先生は考古学者としても民族考古学の中でも有名な業績をたくさんお持ちだから、良い機会ではないかということでお話を頂きました。最初私は、神話と聞いて少し腰が引けたと言いますか、神話など全然知らないし、考古学と神話はあまり関係ないのではないかと思いますし、どうしようかと迷った記憶があります。でも、その研究会の第1回目が同志社女子大の今出川キャンパスで行われて、後に南山大学に行かれる加藤隆浩先生とか花園大学の丸山顕徳先生などと共に参加させていただいて以来、途中から面白くなってしまい、私は行ける範囲でずっと神話の研究会に参加させていただいていました。

山田さんを通じて、自分は神話的なものにも少し興味を持ち、大林太良という人をもっと勉強してみようかと思ったわけですが、その中で、大林太良は考古学をかなり踏み込んでやられていて、物質文化というものもかなり研究調査をされているということを知りました。私が山田さんと知り合ったときは既に大林は亡くなっておられて、直接会うことはなかったのですが、分布図に非常にこだわっていたという話も聞きました。それがどうしてなのかは、山田さんに聞いても詳しいところは分からないということだったので、自分なりに考えてたどってみましたことがあります。

それが今月南山大の論集という形で出されるようですが、実は人類学・考古学における「大きな理論と現場の理論」という共同研究でした。これに後藤先生も私も山田仁史さんも参加していました。思えば南山にお邪魔するのは、山田さんと最後に対面で会った、2020年1月26日の共同研究会に参加して以来です。そのときも中尾世治さんたち

と一緒に飲みに行って楽しかった覚えがありますが、そうしたことの成果として、大林太良の物質文化論について分布図を中心に考えてみました。それはモノもそうですし、神話も類型化して、それを空間的な広がりで示していくことは非常に共通していて、これを比較するための基礎的な作業だということです。

#### ■ドイツの神話研究は大林にどのような影響を与えたか

ベリョスキンはロシアの神話学者ですが、分布図 (distribution) を非常に多用して現在も論文を発表しています。山田仁史さんとも交流がありました。そういうところとモノとの関係ということを考えてみると、分布図は非常に関係が深いのではないかと思います。考古学の場合、分布図は当たり前のように勉強します。ドットを落としてまず分布図を作っていきますが、その教科書的なもので、考古学における遺物の分布図はいつから始まったのかを確認すると、やはりドイツに関係しています。ドイツのフォスという人が、初めて土器形式の空間的な分布図を作りました。遺跡の現場の平面図なのだそうです。類型化したものをドットして1900年に発表されています。

それをより広範囲に、ゲルマン民族と結び付けて遺物の類型をヨーロッパの中にドットで示して行ったのが、よく知られているようにグスタフ・コッシナです。コッシナの分布図は居住考古学としてよく知られているし、ナチズムとの関係で批判を浴びた負の歴史がありますが、分布図はやはりドイツの中で発展していきます。

そもそもこういったものは考古地理学に根があり、地理学的なものから出ています。人文地理学の祖はドイツのラッツェルで、彼は19世紀の終わりぐらいに分布図を使って文化と地理的な空間の変異を説明することを始めた人です。一方ラッツェルは、地理学とは別に『民族学』(Ratzel 1894, 1895) という本も書いていて、その中では、それぞれのエリアの中でこういった特徴的なものを使っているか説明しています。ですから、地理学の影響が考古地理学という形で広まっていったことがたどれるのではないかと思います。

ウィーン学派の人たちも神話の研究で有名ですが、物質文化の研究もかなり推進した一派です。フロベニウスは神話研究者として有名で、彼の説話の分布図は大林太良も頻用しています。さかのぼると、フロベニウスは鞆 (ふいご) の羽口の分類をしたものを分布図で示すといったことをやっています。地理学からの影響なのですが、物質文化と神話を同じように、空間的な差異と類型化したモノがどのように関係しているかを示しています。それが同じ起源を持っている可能性があるのではないかと思います。

大林太良はドイツに行ってこういうことを学んできました。フロベニウスなどの影響を受けていると私は思うのですが、その辺を後藤先生はどうお考えなのかと思っていません。また、ロシアのペリョスキンは旧ソビエトの体制下で国外に行けないので民族誌的なデータを基に分布図を作っていたということですが、そこにドイツの影響との関係、フロベニウスの影響もあるのではないかと感じてしまうのですが、先生はどのようにお考えなのか、もしお考えがあれば教えていただきたいと思います。

実際、山田仁史さんは、「パレオアジア文化史学（文部科学省科学研究費補助金新学術領域研究（研究領域提案型）、平成28～32年度）」というプロジェクトの中で書いた、「東南アジア古層の神話・世界観と竹利用」で、大林とペリョスキンを引いて、神話と物質文化の関係についてリンクさせた論文を書いています（山田 2020）。このように物質文化と神話研究は、類型化と分布図ということでリンクしていくのではないかと思います。

#### ■遠藤庄治の調査をどう活用するか

もう一つのトピックは、後藤先生が実際のフィールドワークを学ばれた遠藤庄治の調査についてです。私も実際にそれに参加させていただきいろいろと教わった一人ですが、私も遠藤庄治がどういう人かあまりよく知らず、山田仁史さんに聞いたことがあります。すると「説話系の研究会でも、学会の一番前に陣取って聞いている先生だよ」と言われました。さかのぼって遠藤庄治の文章を見ていくと、「地域史と民話」の中で地域史をどのように掘り起こすかということに関する文章があり、その中に、民話というものが非常に重要だと言うために、有形の文化と対峙させて無形の伝承文化をどう位置付けるか書かれているところがあります。こういったことを考えておられたということで、今日後藤先生が示された写真は、沖縄の民具研究を本格的にスタートさせた上江洲均と、無形の伝承文化を掘り起こそうと尽力された遠藤庄治の関係性の非常に象徴的な写真（P. 25、図13）だと思います。「この話は、今聞いておかなければ話者が話してくれる可能性がなくなってしまう」と、かなりたくさんのお話を採話されています。これらを遠藤の死後、NPO 沖縄伝承話資料センターが整理しました。後藤先生には、遠藤が中心になって集めてられた貴重なデータをこれからどう活用していくのが一番良いのか、お考えがあれば教えていただければと思います。

#### ■「民具」とは何か

神奈川大学には日本常民文化研究所というところがあり、私も所員をしています。これは、「民具」という言葉を命名した渋沢敬三がつくった、今から102年前にできたアチック・ミュージアムが前身となっています。ここで集められ、日本常民文化研究所が持っていた民具は、今、国立民族学博物館に収蔵されています。この中には旧植民地の台湾や朝鮮半島の民具も入っています。

民具というと何か内向きのような、フォークロアの場合は非常に日本に限定的なイメージになりがちです。しかし実際、今は名古屋もそうですし、私が住んでいる横浜も、外国人が地域住民になってもおかしくない時代になり、ルーツが違うけれども今は日本国民であるということは全く当たり前の時代です。「日本伝統の」とか「日本だけの」ということにこだわることも一つ意味はあるとは思いますが、今、民具といわれると、学生たちは、「博物館や資料館にあるもので、自分たちは使ったこともない縁がないものだ」と思いがちで、実際そうです。それをいくら教えても実感が湧きません。では、彼らにとって身近な民具は一体何だろうかとなると、より広い概念でものを見ていかないと駄目だろうということで、物質文化あるいは現代民具という言葉の方がしっくりくるような感じがします。

もう一つは国際性です。今日も後藤先生がハワイで日系移民の墓標を調査研究されたことの中で、言語文化と物質文化、生態学と形態学という分類をされていました。常民文化研究所のランチに非文字資料研究センターというところがありますが、文字資料に対して、民具、物質文化だけではなく、身体技法や絵画や写真なども含めたものを非文字資料と呼んでいます。そういった考えに近いような気がします。ですから、ブラジルのレジストロ市サウダーデという墓地に日系人の墓が600基ほどあるのですが、私も後藤先生のハワイでの実践に倣い、それらを一つ一つ調べてデータベース化しました。キリスト教徒なので十字架をかたどり現地化しているものもあれば、仏式を保っているものもあります。ここでも先生がおっしゃったように、2世、3世となると漢字が読めないのが漢字からポルトガル語になっていくといった変化があったりして、紀年銘の話もまさにそうです。勝ち組・負け組はブラジルの場合もあるわけで、沖縄から移民した人も多いです。そのようなことを自分自身も経験することによって、後藤先生が考えてこられたことを追従することで、さらに考えるきっかけを得ました。

このように海外との関係を考えると、このコロナの時代、ウクライナの戦争でもそうですが、いくら離れていてもどこかで起こったことはつながっているということは痛いほどよく分かったと思います。2023年の令和の時代に、物質文化研究というより、われ

われ日本常民文化研究所として後藤先生にお伺いしたいのは、民具という言葉です。現代の民具として対象とすべきものを一体どうしたらいいのか見えない状況です。私はこれを物質文化というように広く見るべきだと思っているのですが、また違ったお考えがあればお教えいただけたらと思います。

